琉球大学学術リポジトリ

越境する沖縄関係資料ー阪巻・宝玲文庫資料の電子化共有プロジェクト経験を通して

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学附属図書館
	公開日: 2017-05-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: バゼル 山本, 登紀子, Bazzell Yamamoto, Tokiko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36612

越境する沖縄関係資料ー阪巻・宝玲文庫資料の電子化共有プロジェクト経験を通して
ーOkinawa Resources Without Borders: My partnership experience on the Sakamaki/Hawley Collection digitization project

December 16, 2015

バゼル　山本　登紀子（Tokiko Y. Bazzell）

はじめに

本日は「阪巻・宝玲文庫の世界」事業報告・研究報告会にご参加頂きましてどうも有難うございます。私は、ハワイ大学マノア校図書館と琉球大学附属図書館協働、「阪巻・宝玲文庫デジタル化プロジェクト」のハワイ大学側の総括をしております。この後の研究者の皆様の研究報告の前に、

「越境する沖縄関係資料ー阪巻・宝玲文庫資料の電子化共有プロジェクト経験を通してー」と題し、事業の報告ならびにこの 2 年間の琉球大学とハワイ大学マノア校の協働事業に参加させて頂きました経験を基に、次のトピックでご報告させて頂きます。

ハワイ大学マノア校所蔵阪巻・宝玲文庫

阪巻・宝玲文庫についてご存知の方はどの位いらっしゃいますか？手を上げてください。ご参加の皆様の中にはご存知の方も多いようですが、ごく簡単にこの文庫についてご紹介します。

「阪巻・宝玲文庫」はハワイ大学マノア校図書館アジアコレクション部の沖縄研究資料の中にあります特殊文庫です。琉球大学チームがフランク・ホーレーと阪巻駿三の写真からこのような素敵なロゴを作成してくださいました。「阪巻・宝玲文庫」は、こちら左側の英国人フランク・ホーレーが収集した 15 世紀から 1960 年初期までの琉球・沖縄関連文献約 2000 点に、本校の歴史学者だった阪巻駿三が収集した文献を加えた資料群です。

沖縄戦で多くの資料が焼失し、残された資料の多くが散逸してしまった中、沖縄関係のまとまった第一級の資料として、貴重な資料群と言われています。またホーレーは異なる「版」の資料を多く収集し、一箇所で同時に数点の異なる版の資料を閲覧することができる文庫として多くの研究者の利用に供しています。

資料形態は、巻子物、掛軸、写本、版画、折本、地図類、版本、画帖仕立て、この画像にはありませんが洋装本と、多岐に亘る資料群です。今回のデジタルプロジェクトはフランク･ホーレーが収集した「宝玲文庫」を主に対象とするものです。

阪巻・宝玲文庫デジタルプロジェクト（以下「プロジェクト」）の概要

先ほど冨田様から概略が報告されましたが、ここで琉球大学とハワイ大学マノア校協働プロジェクトの全体像を見てみたと思います。

主な取組事項を簡略化したタイムラインをご紹介します。

具体的に今回の協働プロジェクト計画が動きだしましたのは、2012 年 8 月、琉球大学からハワイ大学に贈呈されたシーサの受領式に、琉球大学学長、大学関係者の皆様が本校にいらした折です。岩政学長（当時）、大城現学長が阪巻・宝玲文庫に立ち寄られた際に、プロジェクト案のご提案を頂きました。

同年 12 月に第 1 期資料調査をし、対象資料の選定と覚書・仕様書の準備を始めました。こちらの写真はこの 12 月の資料調査の際に赤嶺守先生が拓本を調べていらっしゃる様子です。

両校図書館は、翌年 2013 年 9 月に覚書を交換することができました。今回一緒に来沖しております、当館館長 Irene Herold が 8 月に就任し、その直後に覚書に調印することができました。そして 11 月より当館内のデジタルラボで電子化を開始しました。

デジタル画像は月に 1 度の頻数で DVD をハワイ大学から琉球大学に送付し、琉球大学では平行してデータ加工、ウェブコンテンツの構築、英訳等の工程を始めています。

2014 年秋にまず最初の 110 題目をウェブ公開、2015 年春に更に 110 題目が公開されました。2 月からは第一期分の大型資料のデジタル化を始めました。今年 2015 年 3 月に二回目の文献調査をしました。この写真は、冨田様と崎原様が調査なさっている様子です。

そして 2015 年 4 月から第二期デジタル化を開始しました。現在資料の前準備が終了した数点のデジタル化をしています。プロジェクトは来年 2016 年 3 月に終了する計画です。この間、同時進行で琉球大学チームの作業が進んでいます。

乗り越えなければならないハードル

私は 15 年前に現職に就いた時から、将来、阪巻・宝玲文庫の資料をデジタル化し、オープンアクセスとして広く共有したいとの希望を抱いておりました。しかし大型規模のデジタルプロジェクトを当館で実行するには、乗り越えなければならないハードルがありました。数例を見てみます。

資料内容の専門知識

宝玲文庫の整理は文庫購入直後に、比嘉春潮先生と仲原善忠先生をお招きして行われました。当時マノア校には崎原貢、松田貢など、沖縄研究を専門とする人たちがいました。

阪巻先生がお亡くなりになった後、宝玲文庫は阪巻先生の資料と共に、大学キャンパスのサマーセッションという部署からマノア校図書館に移管されました。そして 1980 年代には私の前任者であった松井正人氏が、ノートルダム清心女子大学の横山學先生と移管された宝玲文庫の整理をなさり、文庫の目録を作成なさっています。本日は横山先生が岡山からご参加くださっています。2000 年初期に私が引き継いでから、先生の目録を基に再整理をし、題目リストをウェブ上で公開しました。

宝玲文庫は、主に日本から多くの研究者に利用して頂いておりますが、購入から数十年の間に、本学キャンパス内で文庫全体の資料を研究する専門知識を持つ研究者がいない状態が続きました。デジタル化した資料に付加価値をつけることができる専門知識を有する人材をキャンパス内で動員することは不可能です。

図書館内スタッフの現状

ハワイ大学だけでなく、北米の全ての大学研究図書館にある地域研究資料管理の状況ですが、日本関係資料の蔵書数が大きなものであっても、それを構築・管理する常勤の専門ライブラリアンは各機関に一人です。この一人が、様々な図書館運営全体の仕事に時間を割り振っていかなければなりません。阪巻・宝玲文庫は大切な特殊文庫ですが、当館には他にも多くの特殊文庫があり、其々を整理・管理するためには非常に時間と労力がかかります。一機関内だけで日本関係資料の大型デジタルプロジェクトを立ち上げ、進めることは容易なことではありません。

図書館内での資金とプロジェクト優先順位

阪巻・宝玲文庫の資料は非常に特殊な専門的なものです。私が就任しました時は、図書館内のアメリカ人スタッフの中で、それが何であるかを知っている人はいませんでした。その資料的価値は、当館内より外部の専門家の間でより高く評価され、正確にまた

具体的に理解されていると言えます。その専門性・特殊性ゆえに、海外にある大学図書館内で特別予算配分やプロジェクト優先順位を計る時、広範で一般的なプロジェクトや地元関連の政治的なプロジェクトとの競争に打ち勝つことは容易なことではありません。

このようなハードルを抱えた海外の１機関だけでは、とうてい達成できなかったプロジェクトの夢を琉球大学と協働することでその道が開かれました。

協働事業の特徴

この協働事業には他の協働事業にはない特徴があります。

オリジナル資料はハワイ大学マノア校図書館が所蔵し、ハワイ大学マノア校図書館がデジタル化し、そのデジタル画像の元データを国境を越えた沖縄の琉球大学に送付し、琉球大学がデータ加工および付加価値を構築し、付加価値の付いた画像を琉球大学のサーバー上で発信公開すると言う越境したプロジェクトである点です。

既存のデジタルプロジェクトは、ほとんどが資料を所蔵している機関がデータ加工をし、その機関から公開するのが常套手段である中、このような形で国際的大型プロジェクトを進めている機関はまだないか、私は存じ上げませんが、あったとしてもかなり特殊な数少ない例と言えます。

さらに、このプロジェクトのもう 1 つのの特徴は、両機関の研究者・ライブラリアン・情報/資料スペシャリスト・修復師、画像データ技術者、管理者という多分野の専門家で構成された国際チームで進められていることです。

プロジェクト工程

具体的に両校チームの主なプロジェクト工程をスライドを使ってご紹介したいと思います。

すでに沖縄関係貴重書のデジタル公開経験を蓄積なさっている琉球大学附属図書館がプロジェクト全体を主導して下さっています。まずこの部分は資料選定部分を示しています。琉球大学の司書の方と研究者の皆さんがハワイにいらして調査なさいました。私はその補佐をしました。

ここのパイの部分を拡大してみます。デジタルラボの技術者、修復師等が協力して作業しています。

ご覧頂いているスライドは当館内のデジタルラボでのスキャニングの様子です。劣化した資料やスキャニングが困難な状態の資料で、基本的な補修で解決できる資料には、当館保存部の修復師が資料のスキャニング前準備を施します。ただし複雑な補修等が必要なものやスキャニングをすることで資料が痛む可能性があるようなものは、今回のデジタル化資料から外しています。

画像データが沖縄に送られると、琉球大学チームがデータ加工、翻刻、現代語訳、解説、英語訳等の付加価値の構築およびウェブ公開へとプロジェクトを進めていきます。

冨田氏は補助金・資金の獲得を含めた全ての工程に直接関わる全体のプロジェクトマネジャーであり、加えて沖縄研究者としての専門知識を活かし、付加価値を構築するチームのコンテンツマネージャーです。

現在翻刻作業には 3 人の専門家が携わっていらっしゃるとのことです。翻刻に関する凡例や基準規定等はウェブ上で公開しています。ドラフトは 3 回の校正を行い、不明確な部分は琉球大学の先生とご相談なさり、最終的に判読が難しい字は = コードをつけて公開します。ネット公開することでより広範な研究者から判読のご教示を得ることができるかもしれません。

また、サイトには英語訳をつけています。それによって日本語を母国語としない研究者のために英語で要約等を提供し、アクセスの利便性を高めています。

現在琉大チームには、お一人の英語翻訳担当の方がいらっしゃいますが、沖縄資料をご専門になさっている方ではありませんので、研究者・専門家の方々と最初から一緒に工程作業をされ、内容の微妙なニュアンス等の理解を高めて頂いているそうです。英語訳の最終校正にはハワイ大学のロバート・ヒューイ先生が参加なさっています。

希少資料のデジタル共有の意義と目標

ここで阪巻・宝玲文庫デジタルプロジェクトの意義をまとめてみます。大きくわけて 4 点であると認識しています。

<u>資料保存</u>

デジタル化することで原資料の直接利用・取り扱い頻度を減らし、劣化を最小限にとどめ、原資料を安全に保存し、後世へ継承していくことができます。

高解像度（600+dpi）画像を保存ファイル（TIFF)として複数サーバーおよびメディアで保存（DVD & HD）しています。

研究・発見への触媒

デジタル資料を広く共有し、より多くの研究者の研究支援に貢献し、新たな発見の触媒的役割を期待できると思います。それには画像を提供するだけでなく、書誌情報、原資料の典拠を提供し、資料の信憑性を高めることを目指しています。また、専門家による解説・概略・背景情報等を画像と共に提供し付加価値を高めています。英語での書誌情報・概略を加え、日本語を母国語としない研究者の関心を促進することも重要だと考えられます。

教育・学習への活用

資料をカリキュラムに組み込み、学生の関心を刺激し、教育への活用を促進することができると思います。ガラスビューを活用し、多様な学習手段を提供しています。また、解説、時代背景、地理、多言語等付加価値を提供することにより、クロスカルチャー史料を活用し、研究・学習ができる環境を提供していくことができるでしょう。

また、資料を取り入れた分かりやすい解説資料を提供し、学生の興味を刺激できる可能性もあります。例えば、琉大チームがすでに作成提供していらっしゃる『きじむんのどぅーちゅいむにー』シリーズのように、資料を取り入れた分かりやすいニュースレターや解説資料を提供し、広範囲な興味を刺激することができます。当館では一般掲示板と私のオフィスのドアにもこのシリーズは掲載させて頂いております。『きじむんのどぅーちゅいむにー』の英語版の作成プロジェクトを本校でもこれからやってみたいプロジェクトです。

アウトリーチ活動

オンライン上で公開することは、教育機関を超えたより広いコミュニティーにその存在を知って頂く手段となり、広範なコミュニティーへのアウトリーチ活動のツールとして活用できるでしょう。

デジタル画像と原資料の展示を企画したり、シンポジウム・公開講演等の機会も作り出すことができます。資金収集活動 (fundraising)や、一般からの寄付金・賛同支援活動等にも活用できるでしょう。この後の研究報告がその良い例ですので、ぜひハワイでも同様な報告会を開催したいと思います。

プロジェクトから得ることのできた実体験

私はハワイ大学内のプロジェクトのコミュニケーション調整と、冨田様と共に琉球大学とハワイ大学間のコミュニケーション・プロジェクト調整役をしております。ご一緒

に仕事をさせて頂き、このプロジェクトから貴重な経験を得ることができました。沖縄研究の専門家ではない私個人にとり、ボーナスとなる実体験が色々ありました。

例えば、資料調査の際に、沖縄研究の専門家がいかに資料を取り扱い、研究者がどのような視点から資料を観察し、記録し、調査、選定していくかのを実体験できたことは、ワークショップ等で得られる知識とは異なる貴重なものでした。

このビデオは今年 3 月に冨田さんと崎原さんが資料調査をなさっているところを撮ったものですが、崎原さんが袋とじの内部に書かれた記録を読みあげて、それを冨田さんが記録している場面です。詳細な情報を逃さないよう、非常に事細かに観察なさっていらっしゃり、デジタル画像だけでは分からないこのような「隠れた記録」も探し当てて記録していく作業を拝見しました。このような貴重な体験はどこかで共有できる機会を作りたいと思いました。日本・沖縄研究学生や図書館情報学修士課程の学生、そして図書館情報関係の同僚と共有し、また学習に活用したいと思います。

「越境する沖縄関係資料」デジタル化共有プロジェクトと今後

最後に「越境する沖縄関係資料」とその共有について、そして今後の展望を考えてみたいと思います。

歴史の中には、領域を越えた人間、文化・貿易の交流があります。特に沖縄はその地理的位置関係からも、その地理を活かした政策からも交流のハブとしての役割を担っています。良く使われるこの地図は、アジアにおける沖縄の地理的位置をよく現していますよね。

資料の越境性はその資料がどこにあるのか、どの機関や個人が所蔵しているのか、という資料所在の物理的・地理的な意味での越境があります。

2012 年早稲田大学主催の「復帰 40 年沖縄国際シンポジウム」でパネル討議をしました。琉球大学の古謝様と冨田様を含めた沖縄・ハワイ・北米、欧州を代表するスピーカーの方々がそれぞれの地域に所在する沖縄関連資料の紹介をしました。この時は、南米やオセアニアは含めることはできませんでしたが、世界の異なった地域に所在する沖縄関係資料の広さを実感しました。

また資料の越境は、その資料群がどのようなコンテンツ・情報を含んでいるのか、という内容のスコープ（情報内容の範囲）からみた越境性でもあるでしょう。

阪巻・宝玲文庫内のコンテンツは、沖縄の中から見た沖縄の歴史・文化・記録、この後赤嶺先生が「阪巻・宝玲文庫に見る中国と琉球の世界」の演題で講演なさ

いますが、中国から見た沖縄、日本本土から見た沖縄、西洋から見た沖縄、と、地理的境を越えた資料が満載されています。

宝玲文庫の資料の共有はこれが初めてではありません。琉球大学附属図書館とハワイ大学マノア校図書館間での共有は 50 年前に宝玲文庫を購入した直後の 1964 年から始まっています。1964 年 1 月 9 日付けの阪巻教授に宛てた手紙には、琉球大学学長（当時）与那嶺松助氏から宝玲文庫の 982 頁分の複写の受領報告と協力への感謝が述べられています。その後の書簡によれば、1964 年末までに宝玲文庫から 118 題目と『琉球教育』全巻の複写が琉球大学図書館に送られていたとあります。

またハワイ大学へは阪巻博士から琉球大学学長あてに仲宗根政善先生を通して複写を受諾したことが 1964 年 5 月付書簡にあり、7 月 30 日書簡からは琉球大学附属図書館から頂いた資料を知ることができます。

1972 年の沖縄復帰以後しばらく交流が途絶えていますが、80 年、90 年代には宝玲文庫のマイクロフィルム複写が琉球大学附属図書館に収められています。また、琉球大学との提携ではありませんが、横山學先生を中心に 80 年代に宝玲文庫資料の複製が出版され、90 年代には、筑波大学の岩崎宏之先生の『沖縄の歴史情報』が CD-ROM で出され、横山先生の宝玲文庫の目録、全国に散在する沖縄資料の所在、そして数点の画像が紹介されました。この CD は今ではネット公開されていますが、複写機での複写、マイクロフィルム、CD-ROM と、それぞれの年代の技術を利用した資料の共有です。この時代の共有は、技術的な限界があり、1 つの機関から複製なり CD なりを入手したもう 1 つの機関に複製が移動し、その機関内のみのアクセスを確保するという共有のあり方でした。

そこから大きく飛躍し、全世界の不特定多数の人たちが 24 時間カラーの画像で資料にアクセスできるようになりました。

現在では画像提供のサイトは数知れずあります。何度も申し上げますが、重要なのは、画像提供だけではなく、コンテンツ文字をテキスト化し、典拠を明確に示し、解説を加えて提供することです。画像古典籍資料のデジタルテキスト化こそ今一番望まれていることですが、膨大な費用とエネルギーがかかり、なかなか実現できていません。

今後さらにこのプロジェクトが研究に貢献できる部分は、この蓄積したメタデータや元データを更に共有し、連携を拡大していくことかと思います。ライデン大学で冨田様と発表しました後、国文学研究資料館の大型デジタル化プロジェク

トにも今後参考にさせて頂きたい、とのコメントを頂きました。このプロジェクトの付加価値とオープンソースの応用性、そして地理的な境を越えた、越境した連携プロジェクトであるからだと思います。今後、クラウドソーシングなどを利用しての翻刻、データ加工や、デジタルヒュマニティーに応用していく可能性を秘めているプロジェクトであり、より広範な研究者間のオンライン上での情報・意見交換の場を提供することも可能でしょう。次世代へと夢と可能性をつなぐプロジェクトだと信じておりますし、琉球大学のご尽力のおかげで当館の資料が広がっていき、次世代に継承され、さらにエキサイティングな可能性が期待できることに深く感謝いたしております。

日本の外、海外にある資料所蔵機関と、電子化技術や資料研究者を有する機関との越境した国際連携による阪巻・宝玲文庫デジタル化共有プロジェクトは、単独ではなし得ない規模の事業を機関連携により実現している先例であると思います。